

Title	根井雅弘著 マーシャルからケインズへ：経済学における権威と反逆
Sub Title	
Author	丸山, 徹(Maruyama, Tōru)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.83, No.1 (1990. 4) ,p.211- 214
JaLC DOI	10.14991/001.19900401-0211
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900401-0211">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900401-0211</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

根井雅弘著

『マーシャルからケインズへ  
——経済学における権威と反逆——』

(名古屋大学出版会, 平成元年, viii+217頁, 2, 575円)

1. 本年はアルフレッド・マーシャルの名著『経済学原理』が刊行されてから丁度100年の記念すべき年にあたる。一見きわめて平易に見えながら、実はその真意を捕捉することが至難とも言うべきこの古典を丹念に読み解く人は、いまや学界でも稀になった。

根井雅弘氏の名著『マーシャルからケインズへ』は、マーシャルに対する深い敬意と共感に支えられた好読み物である。マーシャルを舞台の中心に据え、彼の経済理論・思想・方法を解き明かしつつ、彼を取り巻く経済学者たちとの思想の交渉を巧みに語る筆のはこびにはいささかの堅さもない。読み進むにつれて、これが弱冠28歳の学史家の手になる作品かと、私は少なからぬ驚きを禁じえなかった。

しかもこの若い学徒は、既に『現代イギリス経済学の群像』(岩波書店, 平成元年)を公にし、さらに第三の著作『ケインズから現代へ』が近刊予定(日本評論社)と聞いている。恐るべき健筆と言わねばなるまい。

過日、著名な理論家だが学史にも造詣の深いJ.S. チップマン教授と雑談の折、同氏は「忙しい大学院の学生にとって、経済学史などはいわば知的贅沢で、仮に講義を用意しても受講者が殆どいないのだ」と言って肩をすくめた。こういう時代だからこそ、心をひそめて古典を味読し、思索と知恵の軌跡を辿り、それを生み出した人と時代とを鮮かに浮かび上がらせる学史家の仕事に、一人貴重な意義が宿るのだと思う。それは、現代経済学の一層の前進のために役立つ

てる、理論家の側からの学史研究とは全く次元を異にした、もうひとつの創造と言うべきであろう。

この仕事に携るためには、経済学固有の学識が不可欠なことはもちろんだが、さらに加えて、過去の暗闇を見透す歴史家としての洞察力と、それを表現する相当の文筆力が要求される。容易なことではない。根井氏の新著は、著者の多彩な才能が、将来この方向に伸びていく可能性を、十分にうかがわせる作品である。

それだけに、私はあえてこの著者に厳しい注文もつけておきたいと思う。

2. まず、マーシャル経済学の核心を奈辺に求めるべきかという問題について。根井氏はその答えを「進歩による国民分配分の増大」という主題に求める大胆な見解を提示している。『原理』では第6編「国民所得の分配」でこの主題が扱われているのだから、根井説によれば、『原理』の最も重要な部分はこの第6編だということになるのであろう。

確かにマーシャル自身は、ダーウィン＝スペンサー流の進化論の影響の下に、人間性と社会環境との相関を重視し、分配の法則は人間性の進歩に伴って改変されるべきものと考えていた。自らの経済学体系の構築は第6編に始まり、それに先立つ諸章は予備的研究にとどまると述べてもいる。

そのようなマーシャルの意図にもかかわらず、事実としてでき上がったマーシャル経済学の基本構図を彼の需給均衡分析“Marshallian cross”の中に見出す私は、第5編「需要・供給の均衡理論」こそ、『原理』の最も重要な分析的核だとずっと考えてきたし、現在でもそう確信している。J.A. シュムペーターの評価も同様であって、第6編は事実上「第5編の分析の広汎な適用」(*History of Economic Analysis*, Allen & Unwin, London, 1954; p. 835) にすぎないとみなされている。(第1～4編に対するシュムペーターの辛辣な毒舌も見よ。同書 p. 835。)

根井氏は、自説を立証するために、人間性と社会環境の相関を強調するマーシャルの言葉をかなり長々と引用し、そのあとただちに「われわれは、とうとうマーシャル体系の核心にまでたどりついた」(p.73)と結んで、証明の完了を宣告する。

しかしもちろん、これでは何の論証にもなっていない。著者の意図と現実の達成との間には、往々にして大きな間隙がある。マーシャルの分配論が、その実質において何を如何に説明したのか、何故それが核心であるのか、根井氏はマーシャルの全体系に照らして、それを明らかにしなければならない。だが不思議なことに、本書の残り140ページの中には、根井氏の言う「核心」は二度と再び姿を現わさないのである。

現代の分配理論を律する限界生産力説に対し、マーシャルは終始冷淡であった。それは何故か。この疑問に対する答えも、マーシャルの分配論を具体的な姿で再構成する過程の中で自然に見出されるであろう。一步一步の精緻な理論的詰めがなければ、根井氏の主張は具体性を欠いたまま放置され、やがて赤錆におおわれてしまうにちがいない。

3. 本書の全篇に熱と力とを与えているのは、経済学に立ち向うマーシャルの姿勢と方法とに対する、根井氏のみなみならぬ共感の深さである。

最近、哲学と経済学との交渉という視角からの学史研究がジェヴォンズやメンガーをめぐって行なわれ、いくつかの注目すべき成果が生み出されていることは周知のとおりである。他方、マーシャルの方法論については、未だに常識の範囲を越える研究が殆ど存在せず、この問題に深い関心を払っている根井氏の着眼点は高く評価されなければならない。

ただ、経験主義的科学基礎論に自覚的に深く携ったジェヴォンズや、カント哲学の背景をぬきにしては理解不能なメンガーの場合と異なり、マーシャルが認識論固有の問題に積極的にかか

わった形跡は認められない。したがって、認識哲学レベルの問題としてマーシャルの方法論を解明しようとしても、それはおそらく幽霊の追跡に終わるにちがいない。むしろマーシャルの場合は、より実際の着想や叙述のパターンが問題なのである。それだけに扱い方がかえって難しい。

根井氏はマーシャルの方法論の特質を次の二点に要約する。(1)一見無秩序に見える経済現象の中にも一定の秩序が存在することの確認。「自然は飛跳せず」の「連続性の原理」も、主としてこの意味で理解されている。(2)経済の秩序の解明に際しては、力学的発想よりも、むしろ進化論の影響を色濃くとどめた生物学的着想が重視されること。

そして経済学の理想の方法を「事実の蒐集と、事実を結合する観念による分析・構成」の適当な配合に求めたマーシャルに、根井氏は最大限の賞讃を送っている。

しかし根井氏が「マーシャルの経済学上の思考の核心を貫くもの」(p.52)だと言う「連続性の原理」が、単に経済秩序の確信を標榜するレッテルであるとするならば、どう見てもつまらぬ話である。泰山鳴動したメンガー対シュモラーの方法論争の結末がいかに不毛であったか、読者はそれを想起してみるがよい。「事実と観念」云々も月並なお題目で、一向に面白くない。

しかしマーシャルは、分析の対象となる経済現象の変化を概ね連続的とみなし、したがってそれを記述・分析するに連続函数を以てすることの根拠を詳細に論じていることにも注目しよう(『原理』第9版, pp.98-99)。これは分析の手法・スタイルに関する態度決定であると同時に、現象を見る基本的なヴィジョンでもある。すなわち個別的な現象はさまざまな不規則性、不連続性を呈するが、それらを集計したマクロの現象は、そうした不規則性、不連続性が相殺されて、整った滑らかな挙動を示すという、“smoothing by aggregation”の原理がそれである。クールノー、ジェヴォンズ、ワルラスも皆、こ

れと同趣旨の原理を説いて、経済現象の解明に対する解析学の適用を正当化しようとした。「連続性の原理」をここまで深い内容を有するものと解釈すれば、それは単なる常識論を越えた、実質を伴った原理として甦ると思うのであるが、いかがであろうか。

マーシャルの強調する生物学的方法にも、根井氏は共鳴するところがあるらしい。確かに、『原理』の中にはあちこちに、生物学的な発想やアナロジーが散在している。たとえば前節にもふれた、人間と社会環境の相関もその例であるし、ライフ・サイクル理論もその典型例である。収穫逡増と、独占に至らぬ形での均衡とがいかにして両立しうるかという難問に遭遇して、マーシャルは三つの答案を用意した。第一は個別企業にある種の独占力を想定することにより、また第二は外部効果を導入することによって件の困難を克服しようとするものであり、前者は独占的競争論の、そして後者は厚生経済学の重要概念の先駆となった。最後に第三の答案として、企業が内部経済を享受する能力に限界を有することを、生物学的生命循環のアナロジーで説明し、問題の解決を図っている。これがライフ・サイクル理論と呼ばれているものである。

経済社会の問題を生物・有機体の生命現象になぞらえて理解しようとする傾向は、実はドイツ浪漫主義の思想家とよく似ている。

だがそれは、あくまでもひとつの発想源であり、説明上のアナロジーにすぎない。この生物学的方法が単なるアナロジーを越えて、マーシャル経済学の実質に真にかかわりを有するかどうか。根井氏はマーシャルに内在的に、この方法の有効性を立証しなければならない。そうでなければ、再び観念の放置と言わざるを得ない。

ついでに収穫逡増問題との関連でマーシャルが導入した「代表企業」の概念についても一言しておきたい。これは個別企業の均衡を回避して産業の均衡を扱うことを許す便利な概念だが、これについてはL.ロビンズの決定的破壊力を

発揮した批判(*Economic Journal*, 1928)がある。根井氏はこの概念について、「収穫逡増の場合に個々の企業の均衡に依拠して産業の均衡を構成することの困難をマーシャルは熟知していた証拠を示すものであろう」(pp.189-190)とだけ述べて、あっさりと議論を打ち切ってしまう。「代表企業」、「正常状態」等、きわめてマーシャル的な輪郭のぼやけた概念を、根井氏はどう評価するのか。「漠然と正しくあるよりは、明確に間違っている方がよい」というラッセルの警句の意味をいかに考えるのか、根井氏の考えを尋ねたいと思う。

4. 社会思想、政策論について。経済理論の変貌は、当然、社会問題や政策に関する思想にも影響を及ぼす。限界革命を境とする政策思想の変化については、既にT. W. ハチソンの権威ある研究が知られている(*'Positive' Economics and Policy Objectives*, Allen & Unwin, London, 1964, Chap. 3; *On Revolutions and Progress in Economic Knowledge*, Cambridge Univ. Press, London, 1978, Chap. 4)。そして根井氏のマーシャル論もこの方向の研究に一石を投じた有意義な試みである。

社会的正義に関する古典学派の思想は、平等主義からほど遠い。リカードは、貧困の緩和は経済の進歩に依存し、また経済の進歩は徹底した分配上の自由主義に依存すると述べて、分配の不平等を是認する立場に立った。

しかし古典学派の分配理論の退潮とミルの示唆により、分配の正義に関する新しい観念が生まれ流布していったのが、マーシャルの時代の英国であった。H. シジウィックの『経済学原理』(1883)が思潮転換のひとつのメルクマールであるとする根井氏の指摘は正確である。

それだけでなく、効用概念が経済学の前面に復位したことによって政策思想に生じた変化も見逃すことができない。たとえばエッジワース＝マーシャルによる累進課税論の支持・提唱がその例である。ベンサムの影響下にあった

ミルでさえ、累進所得税を「ゆるやかな形態の強奪」と呼んで非難したし、シジウィックも決してこれに積極的支持を表明しなかったことを思うならば、マーシャル以降の社会正義観と過去の学説との断絶は甚だ深いと言わねばならないのである。

他方、ミルは相続税、固定資産税のかなり drastic な累進制には積極的であった。その点「条件の平等、地位の不平等」をモットーに掲げて、所得税を否定し、国家の財源として土地国有化を叫んだワルラスの思想は、マーシャルとは著しい対照をみせながら、むしろきわめてミルに近い地点に立っているのである (Renato Cirillo の諸研究を参照)。

根井氏は第7章において、「終生、『科学的社会主義』の理念を捨てなかったワルラスと、社会主義への憧憬と反発の間を揺れ動いたマーシャル」(p.145)との対比を試みているが、両者の並列的解説にとどまっているのが遺憾である。

根井氏はマーシャルとワルラス、ワルラスとパレートといった人物の交渉を随所に描こうとする。微妙な人間関係の背後に、彼らの思想の特徴を際立たせ、また時代の陰影をあぶり出すことができる場合、それはきわめて有効な思想史の方法となる。だが根井氏はたとえば、「ワ

ルラスとマーシャルは、数理経済学の可能性についての見解が食い違ったために不和になってしまった」(pp.84-85)とか、「ワルラスが純粋な研究者だったのに対して、パレートは老獪な政治家だった」という、甚だ安直な結論で満足してしまう。このアプローチは、実ははるかに肌目こまやかな洞察に裏づけられてはじめて可能になるのである。(たとえばW. ジャッフェの名論文「古い論争の新しい解明」*Cahier Vilfredo Pareto*, 3, 1964などをご覧いただきたい。)

5. 総じて、本書はマーシャルの学問の雰囲気伝えることには、概ね成功していると思う。著者の学説史家としての知見も実に豊富である。しかし他面、「正常状態」・「代表企業」・「<sup>な\*</sup>経済生物学」等々の重要概念が生観念のまま露出し、それらのマーシャル経済学における実質上の意義が語られていないところに不満が残るのである。

器用に表面をなぞったという印象が拭いきれずに残る。思想の深部にふれる、なお一層の堅実・精緻な研鑽を期待する。

丸 山 徹  
(経済学部教授)